

聖霊降臨後第25主日 ルカ20章27―38節

〔直訳〕

27 だが やって来て

サドカイ派のある者たちが、主張する者たちが 復活は ないと、  
質問した 彼に、

28 言いながら、

「先生、 モーセは 書いた 私たちに、

もし ある者の兄弟が 死んだ 妻を持ちながら、

そして この者が 子のない者で あったなら、

ようにと 取る 彼の兄弟が その妻を、

そして おこす 子孫を 彼の兄弟に。

29 さて七人の兄弟が いた。

そして 第一の者が 妻を取って 死んだ 子のない者が。

30 そして 第二の者が、

31 そして 第三の者が 彼女を取った、

だが 同じように 七人がともに 残さなかった 子供を そして 死んだ。

32 のちに その妻もまた 死んだ。

33 さてその妻は 復活において 彼らのうちの誰の 妻となるか

なぜなら 七人が 持った 彼女を 妻として。」

34 そして 言った 彼らに イエスは、

「この世の子たちは めとる そして 嫁ぐ、

35 だが ふさわしいと思われた者たちは

かの世に達することに そして 死者からの復活に、

まためとらない、 また嫁がない。

36 なぜなら 死ぬこともまた もはや 彼らはできない、

なぜなら 天使と同じに 彼らはある、

そして 神の子たちで 彼らはある、

復活の子たちで ありつつ。

37 だが 死者たちが起こされるということを

モーセも 指摘した 柴の箇所で、

彼は言うので 主を

アブラハムの神 そしてイサクの神 そしてヤコブの神と。

38 だが 神は ではない 死者たちの、

そうではなく 生きている者たちの。

なぜならすべての者は 彼に 生きている。

「新共同訳」

27 さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。28 「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。29 ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がありませんで死にました。30 次男、31 三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さずに死にました。32 最後にその女も死にました。33 すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」34 イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、35 次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。36 この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。37 死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。38 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

① 復活を否定するサドカイ派 (27—33 節)

① a 「サドカイ派」

① a フアリサイ派やエッセネ派と並ぶユダヤ教党派の一つ。サドカイ派は新約聖書の時代には、祭司や地主などの貴族的な階級から支持され、政治的な実権を握り、ユダヤ教の指導的な地位にあった保守的な人たちから成り立っていた。祭司階級との強い結びつきのゆえに(使五 17 参照)、サドカイ派の活動舞台は主にエルサレム神殿にあった。そのため、神殿が失われた紀元後 70 年以降は指導的な地位をフアリサイ派に譲ることになった。

① b サドカイ派の特徴は、旧約聖書のモーセ五書の権威を、他の文書にまして特別に重んじたことにある。モーセ律法には父祖から伝えられた解釈があり、これをフアリサイ派は口伝の律法として、書かれた律法と同じく尊重した(マコ七 3)。モーセ律法の掟の多くは生活が単純だった過去の時代に書かれたが、新しい時代になると、掟と一般民衆の生活の間にずれが生じてきた。このような事情が、フアリサイ派が口伝の律法を重んじた背景にある。しかし、サドカイ派は祭司や金持ちなどの貴族階級と結びついていたために、こうしたずれを切実に受けとめず、口伝律法の権威を認めなかった。

① b 「復活はないと主張する」

① c 27 節では「サドカイ派のある者たち」が、「復活はないと主張する者たち」と説明されている。フアリサイ派やエッセネ派は死後の生命や魂の不死を信じており、それはイエスの時代の平均的ユダヤ人の気持ちでもあった。これに対して、サドカイ派は魂の死後の存続や報いなどを否定する。フアリサイ派は復活や天使や霊の存在を認めたが、サドカイ派はこれらをいずれも否定しており(使二三 8)、彼らの生き方には現世主義の面があったと思われる。サドカイ派が復活を信じないのは、それが、彼らが信仰の拠り所とする成文律法、つまりモーセ五書に書かれていないからである。

① d 新約聖書では、復活をめぐる論争が行われる箇所、サドカイ派がよく登場する。最高法院の議員たちの中にフアリサイ派とサドカイ派がいることを知ったパウロが「兄弟たち、わた

しは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていることで、わたしは裁判にかけられているのです。」と言うと(使二三6)、両派に論争が生じ、混乱の中でパウロは兵士たちによって議場から兵営に連れ出される。サドカイ派はファリサイ派と一緒に登場し、洗者ヨハネから「まむしの子」と呼ばれ(マタ三7)、イエスの敵になっている(一六1・6・11・12)。

◎「先生」

ユダヤ教の教師の称号である「ラビ」にあたる呼びかけとして、イエスが「先生」と呼ばれている。ヘブライ語の「ラツビー」は「私の上に立つ者」を意味する。マグダラのマリアは復活のイエスに「ラボニ」と呼びかけているが(ヨハ二〇16)、これは「ラツビー」の強調形である。ルカ福音書は、「上に立てられている人」を意味するギリシア語の「エピスタテース」を、イエスへの呼称として7回用いている(五5、八24(2回)・45、九33・49、一七13)。この呼称は新約聖書ではルカだけに現れ、十人の重い皮膚病を患った人たちの他は、イエスの弟子だけが用い、イエスへのある程度の信仰を示す(共観福音書の並行箇所では名詞ディダスカロス〈先生〉の呼称が使われている)。

④「もしある者の兄弟が妻を持ちながら死んだ：」。

⑦レビラト婚(子どものいないやもめがその義兄弟と行う義務的な結婚)はモーセ五書に定められている規定である(申二五5、創三八8)。これを用いて、サドカイ派の人々はイエスに復活の有無を問う。28節の五行目の「(取るそしておこす)ようにと」は、二行目の「書いた」につながる。「もしある者の兄弟が妻を持ちながら死んで、この者が子のない者であったならば、彼の兄弟がその妻を取り、そして彼の兄弟に子孫をおこすようにと、モーセは書いた」となる。子のないまま死んだ兄弟を七人も登場させたのは、復活の馬鹿らしさを強調するためである。

①サドカイ派は、復活があるなら、モーセが定めたレビラト婚と衝突することになると主張する。というのは、この世で七人も夫を持った「妻」は天の国で、だれの妻になるのか、重婚を犯すことになりはしないかと心配するからである。聖書はレビラト婚を奨励し、重婚を禁じている。それに復活を明確に述べる箇所は少なくとも「モーセ五書」には見当たらない。従って、復活はあり得ないと断定する彼らの見解は、聖書に裏づけられた正しい考え方だと自信をもって主張している。

②死者たちが起こされる(34—38節)

①「かの世に達することに、そして死者からの復活にふさわしいと思われた者たちは」(35節前半)このような表現は「正しい者だけが復活する」という考えを前提にしているが(使二三46)、ここでは「ふさわしい者」はだれであるかという問題にはいっさい触れてはいない。36節4行目の「ありつつ」は分詞形。ここでは理由を表す用法とも考えられる。そうであれば、「彼らは復活の子であるのだから」の意味となる。「かの世」は「この世」に対比された「来るべき世」のことであり、そこには新しい命の形態がある。

③「死者たちが起こされるということ」(37節1行目)

これは2行目の動詞「指摘した」の目的語となっている。動詞よりも前に置いたのは、強調のためと思われる。イエスはサドカイ派に対して復活を説明するために「柴の箇所」を引用す

る。「柴の箇所」とは出エジプト記3章であり、サドカイ派の認めるモーセ五書に含まれている。サドカイ派は復活を否定するが、彼らが根拠とした聖書そのものが復活を認めており、彼らの考え方が聖書に合わないことを、モーセ五書を引用してイエスは指摘する(37―38節)。

◎「めとることも嫁ぐこともない」(34―36節)  
サドカイ派は次の世でのあり方について誤解をしているが、イエスはそれをまず指摘する。「この世の子ら」には死があるから、子孫を通して自分が生き残るようにと、結婚をして、子供をもうける必要がある。しかし、「死者からの復活にふさわしい」者はもはや死ぬことがないから、めとることも嫁ぐことも不要となる。彼らは「天使と同じ」であり、「復活の子たち」であるから「神の子たち」でもある。サドカイ派の人たちは、この世の生活形態が死後にも続くと考え、重婚にならないかと心配した。しかし、イエスは「復活の子たち」はもはや死を味わうことがなく、新しい存在であり、男も女も互いに兄弟姉妹として生きることになると教える。「復活の子たち」は結婚を必要としないから、重婚の心配もなくなる。

④「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」(37―38節)

⑦神が燃える柴の中からモーセに語りかけたとき、アブラハムはすでにこの世から姿を消していたが、神は「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と名乗っている(出三・6・14―17)。この表現は、過去において「アブラハムの神だった」ということではなく、今も「アブラハムの神」であり続けるということを意味する。

①なぜなら、神がアブラハムやその子孫たちと結んだ契約は有効であり続け、彼らの死によってそれが途切れることはないからである。神は「生きている者の神」であるから、人は生きているうちに神との関わりを持つことができる。しかも、その関わりは神の誠実さのゆえにいつまでも、たとえ死の後も続く。アブラハムやイサク、ヤコブは生前、神との関わりに生きていた。だから、その関わりは今も続くものであり、神との関わりの中にこそ、彼らは今も生きている。イエスは復活の根拠を、神が人と結ばれた契約に置いていると言っていることができる。キリストと結ばれて生きる者は、すでにその「永遠のいのち」を生き始めているのである。

### ③ヨハネ19章23―27節

23 どうか

わたしの言葉が書き留められるように  
碑文として刻まれるように。

24 たがねで岩に刻まれ、鉛で黒々と記され  
いつまでも残るように。

25 わたしは知っている  
わたしを贖う方は生きておられ

ついに塵の上に立たれるであろう。

26 この皮膚が損なわれようとも

この身をもって

わたしは神を仰ぎ見るであろう。

27 このわたしが仰ぎ見る

ほかならぬこの目で見る。

腹の底から焦がれ、はらわたは絶え入る。

㉑ 神の許しを得たサタンはヨブに苦しみを与えた。ヨブは財産も子どもも失い、さらに全身ひどい皮膚病に襲われる。ヨブは、激しい苦痛の中で自分が生きていることを呪い、嘆く(3章)。苦しむヨブにとっては、「光を見ない」こと、すなわち「死」こそが「憩いを得る」ことにはほかならない(三16-17)。「疲れ、労苦、悩み」を終わらせるのは「死」だけだと考えるヨブには、労苦する者をなおも生かす神の意図が見えない。神の答えを求めて、彼は「なぜ」と繰り返して叫ぶ。

㉒ 神の答えが見つからないヨブは、「静けさも、やすらぎも失い、憩うこともできず、わたしはわななく」(三26)と嘆く。三人の友人たちは、ヨブの苦しみを神による「懲らしめと戒め」だと見なしている(五17)。応報主義(正しい者は報われ、悪人は罰せられる)から抜け出すことのできない友人たちは、苦しみは罪の結果であり、神が間違いを犯すことはありえないから、ヨブこそ謙虚に罪を認めて、神の憐れみを乞うべきだと語り、そうすれば「神は必ずあなたを顧み、あなたの権利を認めて、あなたの家を元どおりにしてください」(八6)と諭す。

㉓ 友人たちとヨブの隔たりは、議論を繰り返せば繰り返すほど、広がっていく。しかし、友人に失望したヨブはもう一方で、天には「わたしを弁護してください」があると語るようになり、「わたしのために執り成す方、わたしの友、神を仰いでわたしの目は涙を流す」と告白する(一六19-20)。今は神の不当性を主張せざるをえないヨブだが、しかし、その苦しめている神だけが自分の真の「友」になりうると考え始めている。

㉔ ヨブは、神の前で人間は無力であり、自分の正しさも主張できない者であると認めている。人は神に対して言うべき言葉を持たない者であるから、ヨブの正しさが認められるのは、「裁く方が憐れみをくださる」ときだけである(九14-15)。だからこそ、たとえ聞き入れられなくても、自分は正しいと言いつけるほかヨブには道がない。ヨブが神に抗議をし続けるのは、神の憐れみを受けたいからであり、神の答えを聞きたいからである。友人たちが「無駄口、嘲りの言葉」(一一3)と呆れるほどにヨブは語り続ける。神が自分を見捨ててしまうはずがないという思いだけが、孤独なヨブを支えている。

㉕ 神の答えを聞くことができず、神が自分を追いつめているとしか思えない状況の中で、ヨブは「わたしは知っている。わたしを贖う方は生きておられ、ついには塵の上に立たれるであろう」と語る。ヨブはまだ神に無罪と認めてもらえないが、自分の潔白を弁護する「贖う方」がいると確信している。

㉖ 「贖う方」と訳されたヘブライ語はゴエールであり、動詞ガールから派生した名詞である。ゴエールが「親戚」の意味であることに示されているように、ガールは基本的には「親戚として振る舞う」を意味する。従って、古代イスラエルの親戚が果たすべき義務に応じた行為を表すことになる。例えば「(血の)復讐をする者」(民三五19)、「(家を絶やさぬ)責任のある人間」(ルツ三12)はゴエールである。また、レビ記25章25節に

もし同胞の一人が貧しくなったため、自分の所有地の一部を売ったならば、それを買い戻す義務を負う親戚が来て、売った土地を買い戻さねばならない。

とあるが、「買い戻す義務のある親戚」はゴーエール、「買い戻す」がガールである。古代イスラエルでの親戚は身内が売りに出した土地を買い戻す義務があった。

㊦ ヨブが「わたしを贖う方」と言うとき、神を指しているのか、だれかほかの人物を指しているのかという問題がある。もし神を指しているなら、神が自分を追いつめる敵とさえ思える中で、それでも神が自分を「贖う方、親戚」であるという神への信頼が表されていることになる。

㊧ 19章23―27節では、絶望の底からヨブが力強く希望を語っており、伝統的には、復活の希望を予告する箇所と見なされてきた。25節の「塵」もヨブの死を暗示するものと取ることができるが、死者の復活という理念が現れるのは、後代になってから、この地上での生活や行いに対する報いという考えが強くなってからのことである。

#### ④復活の命

㊨ 旧約聖書では、死者は陰府に下り、陰のような存在になるとされ、神は彼らに力を發揮することはできないとされていた。復活という考え方は、旧約聖書の中でも紀元前3世紀頃に書かれたと思われる新しい文書になって初めて登場する。それ以前は、復活を思わせる箇所はあっても、明確には述べる箇所はない。

㊩ マカバイ記二7章9節以下には、殉教する兄弟たちが、「復活」を確信して死んでいく描写がある。この箇所では、ギリシア的な靈魂不滅の思想ではなく、「体のよみがえり」が語られ、また殉教もいとわない義人の復活が語られている。マカバイ記二は紀元前一二四年に著されたと見られているが、この頃から、復活信仰が明確な形で語られるようになった。神を信じて死んだのに、死後は神の恵みとは無縁の生を陰府で送るのはおかしい、という考えが起り、個人の復活という思想が取り入れられるようになったと考えられている。復活という考え方は、外国からの影響を受けて、ユダヤ教に根づいたと見られている。

㊪ 伝統に固執するサドカイ派の目には、復活は伝統的な信仰にもとる「外国かぶれ」の考えと映ったのかもしれない。彼らが持ち出した議論の、復活などありえないというような調子は、復活という新奇な考えに対する反感をよく表している。彼らのイエスへの問いは思弁的で、彼らの実生活からは遊離した、非実存的な問いであった。このような問いを投げ掛けるところに、現実の人間や社会に対するサドカイ派の関わり方が表れている。復活という考え方が苦しむ者への神の恵みとして信じられてきたことを考えると、サドカイ派の人々は、現実の苦しみに向き合うことがなかったことも、この議論から見取ることができる。

㊫ サドカイ派の人々は、復活とは今の生活に戻ることと考えていたが、その考えが全くの誤解であることをイエスは指摘する。「来るべき世」の在り方は「この世」の在り方とは全く異なる。復活とは、死後、「この世」に戻って生き直すことではなく、神が与える新しい命を生きる。「めとることも嫁ぐこともない」生き方とは、全存在を神に委ねて、すべての思い煩いから解放されて生きることである。

㊬ 生きている者の神が「わたしはアブラハムの神」と宣言する。アブラハムは神との関係の中で今も生きており、神との間に生じた関係が不変であることをイエスは主張する。神との交わりを持つ者は、死後も、約束を必ず果たす神の誠実さのゆえに、その関わりの中で生き続ける。ヨブは命の終わりを見つめながら、苦しみの意味を神に問い、神の答えを待ち続けた。生きている今、ヨブのように神に問い続け、神との交わりを求め続けるとき、復活の命へと近づいている。